

研究集会開催報告書

自然科学研究機構
国立天文台長 殿

平成22年10月2日

(代表者)
所属・職名 帝京平成大学・教授

氏 名 中村 士



研究集会名	第7回東洋天文学史国際会議 (ICOA-7)
開催期間	2010年 9 月 6 日 ~ 2010 年 9 月 10 日
開催場所	三鷹市大沢2-21-1、国立天文台(大セミナー室)
参加人数	56名 (海外31名、日本25名)
研究集会の概要	○研究発表は4日間、Session A-H (Pre-modern times)、Session I-N (Modern times & Other recent research)に分けて行なわれた。招待講演12件、一般講演29件、ポスター発表は24件であった。 ○最終日、野辺山宇宙電波観測所と諏訪の儀象堂博物館に見学旅行を実施した。文科系研究者は野辺山には興味を持たないと危惧したが、予想に反して参加が多く、活発な質問も出て、主催者としては安堵した。 ○3日目に国立天文台内の歴史的施設見学を行なったが、国立天文台を海外参加者に広く知ってもらうための役に立ったと思う。

研究集会の成果	○ICOA-7では、戦後の天体物理学の発展史、電波天文学の歴史などを、日本、オーストラリア、タイ、ウズベキスタンなどが発表したのが大きな特徴だと言える。アジア諸国の中には古い天文学の歴史を持たない国もあるので、戦後の天文学発達史をICOAのテーマに含めることで参加する側の敷居が低くなったと理解している。 ○インド、韓国、日本、ヨーロッパの考古天文学について発表があり、各国の共通点や比較の議論が活発に行なわれた。 ○初期のICOAは東アジア・インドからの参加が主だったが、今回はイラン、ウズベキスタン、オーストラリアからも参加があり、国際交流の範囲が拡大した。 ○従来、次回の開催国の引受け手を決めるのに難航した。しかし、今回は中国とインドが立候補して競争になり、調整の末2013年に中国と決定した。このことは、我々がICOA-7の開催を1年半前から準備したために、ICOA-7が国際的に認識された結果だったと考えている(各国のインターネットに多数紹介された)。
その他参考 となる事項 (希望事項も含む)	今回の英文proceedingsはSOC委員長とLOC委員長の科学研究費で出版する予定である。 しかし、内容が国際評価に耐えるようなproceedingsであると国立天文台の研究集会委員会が認定できる場合は、天文台の名で(つまり経費で)出版してもいいのではないか。その刊行がSpringerなどの国際出版社から行なわれるなら、学術的な情報発信と言う意味で、国際社会における国立天文台の地位もより向上すると思う。

第7回東洋天文学史国際会議 (ICOA-7) を終えて

中 村 士

〈帝京平成大学 〒170-8445 東京都豊島区東池袋 2-51-4〉

相 馬 充

〈国立天文台 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

1. はじめに

2010年9月6-9日、第7回東洋天文学史国際会議 (The 7th International Conference on Oriental Astronomy, 以後 ICOA-7 と略記) が国立天文台 (三鷹) で開催された。本小稿の第一筆者が組織委員長, 第二筆者が実行委員会委員長として ICOA-7 にかかわったので, この場をお借りして ICOA の沿革, ICOA-7 会議の概要, 今後の展望などについて簡単に報告させていただきたいと思う。

「東洋天文学史国際会議」は, 韓国延世大学のナー・イルソンさん (Nha Il-Seong, 羅逸星, 現在同大学名誉教授) が提案し, 歴史的な日月食の研究で著名な英国 Durham 大学の R. スティーブソンさん (Richard Stephenson) の協力を得て, 1993年10月にソウルで開催されたのが最初である。当初は第2回会議を開くことまで考えていなかったらしいが, 以後ほぼ3年ごとに開催され, この ICOA-7 で18年になる。第2回は1995年に中国のインタン (Yingtang), 第3回は福岡教育大学 (当時) の平井正則さんがホストで1998年に福岡で開催された。以後, 第4回が2001年で中国のナンヤン (Nanyang, 南陽), 第5回は2004年にタイのチェンマイ, 第6回は2008年でオーストラリアのタウンズビル (Townsville) だった。

“東洋”の範囲をどこまでとするか難しい問題で異論も出ているが, 今ではオーストラリア, ニュージーランドまで含めている。それに伴って, 会議が扱う分野も初期には中国文化圏, インド・

イスラムの天文暦学が中心だったようだが, 近年は考古天文学から戦後の天体物理学の発展史まで広範な天文学の歴史が議論されるようになった。

ICOA 関係者が密かに誇りにしているのは, 第5回まですべてキチンとした内容の Proceedings を刊行している点である。第6回の方も編集作業が終了し, 2011年春に Springer から出版される運びになっている。

2. ICOA-7 の準備

第6回はホストのはずの某国が直前に開催をキャンセルしたため, 予定より1年遅れてオーストラリアのジェームズ・クック大学が引受けた経緯があった。そのため, 過去の5回に比べて参加者が最も少なかったにもかかわらず, 日本からはたまたま4名が出席した。参加前からいやな予感がしていたが, 案の定次回の開催国を半ば押しつけられる格好になった。

過去の海外における ICOA は, 国家レベルの支援で開催された例が多かった。しかし, 私たちには会議の資金のあても, 支援してくれる組織・人脈もない。低予算と少ないマンパワーの簡素な会議にするしかなかった。主に通信連絡などの手間を省く目的で, 東京での ICOA-7 開催の1年半前から, ICOA 用の素朴なホームページをまず立ち上げた。そのせいか, 結果的には ICOA の存在が世界各国のかなりのインターネットサイトに紹介され, インターネットの威力を改めて再認識せられた。このホームページには, 過去の ICOA の

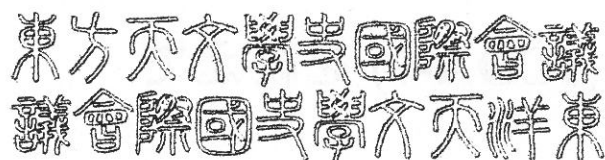


図1 ICOA のロゴマーク。

Proceedings 目次や、世界の天文学史に関する組織へのリンクが載せてあるので興味のある方はご覧いただきたい:

<http://optik2.mtk.nao.ac.jp/~somamt/ICOA-website/ICOA-index.html>

このホームページの表紙を作るに際して、東アジアで始まった国際会議だから、何か漢字を入れたいと思い、余り考えずに篆刻体文字で「東洋天文学史国際会議」というロゴマークをホームページに載せた。そうしたら、早速中国の ICOA 関係者から抗議がきた。中国語では“東洋”とは日本のことだから“東方”に直すべきだと言うのである。辞書を調べると確かに“東洋”は日本の別称としか書かれていない。しかし一般の日本人には東方は単に東の方角という印象が強く、東洋（オリエント）を表す言葉としてはピンとこない。そこでいろいろ思案したあげく、図1のようなロゴマークを採用した。これには IAU（国際天文学連合）の場合がヒントになった。IAU のシンボルマークは古くから IAU と UAI の組合せであるが、これは国際的な場でことあるごとに使用言語を巡って対立した英国とフランスとの妥協の産物なのだそう。ICOA の場合は別に対立ではないが、日本は中国について漢字使用人口が2番目に多い国だから、併記するのが妥当だろうという理屈である。現在まで特に文句はきていない。

3. ICOA-7 会議

LOC 関係者は猛暑の8月中 ICOA-7 の準備に大汗をかいたので、会期中は涼しくなることを期待していたが、2010年夏の異常高温は一向に衰えずインドやインドネシアからの参加者さえも音を上げていた。当初、講演申込みの締切日が近づい

ても講演数が増えず気をもんだ。しかし、最終的には過去6回のどの会議よりも多数の申込みがあった。

参加者の内訳は、韓国13名、中国3名、インド5名、インドネシア2名、イラン2名、オーストラリア2名、ウズベキスタン1名、タイ1名、フランス1名、オランダ1名、日本25名で、参加者の大部分が発表も行ったから、真に国際会議の名に相応しい集会だったと言えよう。招待講演12件、一般講演29件、ポスター発表が24件あり（Abstract Book もホームページに掲載されている）、4日間のシングルセッションの会議としてはこの辺が限度という気がした。

会議の内容は多岐にわたっており、意義・内容を十分のみ込めない論文もあったが、筆者らの理解の範囲で記憶に残った講演を簡単に紹介してみる。どこの国でも、天文考古学（または考古天文学、Archaeoastronomy）は一定の人気があるらしい。今回もインド、韓国、ヨーロッパ・日本の巨石天文考古遺跡と出土品について報告があった。英国のストーンヘンジが天文遺跡の代表であると私たち天文学関係者の多くは疑わないようだが、正統的考古学者の間では天文遺跡説など今でも全く問題にしていない人も少なくない。この事実、そうした遺跡が天文観測施設であることを客観的に証明するのがいかに難しいかを示している。

例えば、北斗七星 (the Big Dipper) について報告があった。天文考古学のテーマとしてはおそらく重要な対象だろう。北斗七星は北半球のどこからでもいつの時期にも見える最も目立つ星座だから、古代人も注目してその形を記録に残したに違いない——この推測自体に異議を唱える人は余りいないだろう。しかし、個々の岩の壁や石片に穿たれた7個の小穴や窪みがはたして北斗七星を表すか否かは別な話で、主観以外の判断基準にまだ乏しい感じを受けた。候補の事例は数多くあるようだから、例えばそれらから、形式的でもよい



図2 会議参加者のグループ写真。

から何段階かの確実度レベルのようなものが作れば、個々の事例をもう少し客観的に判断できるのではないだろうかと感じた。

以前の ICOA に比べて今回は、近代の天文学史についての発表が最も多かったように思う。東洋天文学史のテーマは元来、伝統的に古代の天文暦学が中心だったから、20 世紀以降に発展した天体物理学、電波天文学などの戦後史を会議で扱うのは、特に古参の ICOA メンバーは抵抗を感じたようだ。しかし、アジア各国の天文学には戦後の歴史しか持たない国も少なくないし、電波天文学で戦後まもなく目覚しい成果を上げたオーストラリアなどの例もある。第2次世界大戦後すでに3分の2世紀近くも経ているのだから、戦後史もすでに立派な歴史の範疇と認めざるをえないだろう。そうした観点から、オーストラリア、タイ、ウズベキスタンに加えて、戦後日本の電波天文学、天体物理学の歴史に関する発表も行われた。また、韓国、イラン、インドネシアなどからの若い研究者、大学院生による積極的な発表が印象に残った。

このような国際会議では発表よりもむしろ、合間での意見交換や議論のほうが得るところが多いと考えて、昼休みはあえて1時間半を確保した。ま

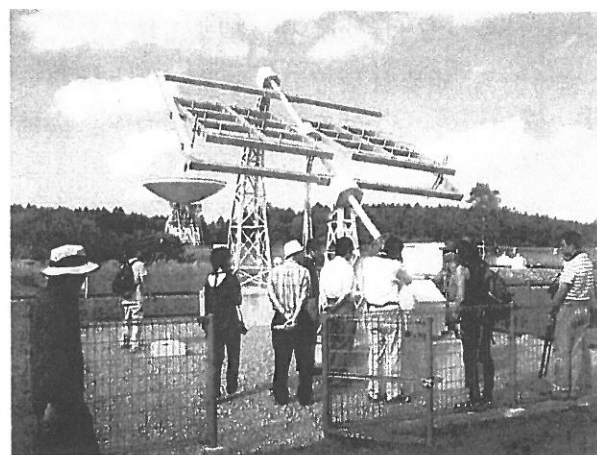


図3 野辺山宇宙電波観測所の見学。

た、過去数年間の各自の論文や著書をもってきてもらい、展示するコーナーを設けて希望者にはコピーサービスを行った。観測儀器的図や星図・星表の資料ではこれが予想外に役立ったように思う。

最終日(10日)は、野辺山宇宙電波観測所と諏訪の時計博物館儀象堂へエクスカージョンに出かけた。野辺山は期待に反して東京と余り変わらない暑さだったのには驚いた。文科系出身で天文学史をやっている研究者は電波天文台などには興味を示さないのではないかと少し危惧したが、特に若い研究者の中には面白がっていろいろ質問する人もいて、バスツアーを楽しんでいる様子だった。

4. ICOA の今後

従来からそうだったが、私たちも ICOA-7 の日本開催を引受けたとき、半ばいやいや承知したという事情があった。開催のための資金調達、会場手配、参加者との連絡、Proceedings の刊行など、準備と会議開催とに非常な労力と時間を取られることが予想されたからであり、実際に終わってみると当初思っていた以上にたいへんだった。だから、次回 (ICOA-8) の開催地を決めるのは難航するだろうと予期していた。

ところが意外なことに今度は事情が違った。中国とインドが ICOA-8 に名乗りを挙げたのである (後で聞いた話だが、積極的な開催希望がなかった場合にはシンガポールも立候補する積もりだったと言う)。組織委員会でのヒヤリングと調整の結果、資金状況、ホスト機関のマンパワー、会場

など両国とも遜色なかったが、2013 年の ICOA-8 が中国の合肥市 (Hefei)、ICOA-9 (2016 年) がインドのボンベイと、2 回先までの開催国が決まってしまった。このことはまさに現在の世界情勢を反映していると言えるだろう。つまり、経済成長が著しく国際的発言権を増している中国とインドが大きな自信をもって名乗り出てきたという印象を受けた。

謝 辞

お世話になった国立天文台国際連携室の関口和寛さん、後藤美千瑠さん、第 3 回とともに LOC 委員としても活動いただいた吉田二美さん、施設の案内をしてくださった野辺山宇宙電波観測所の御子柴 廣さんに感謝する。また、研究集会の経費援助をいただいた国立天文台、および(財)天文学振興財団にも謝意を表する。